

モラエスの庭

— (3) 異邦人のまなざし —

宮崎隆義, 佐藤征弥, 境泉洋

徳島大学大学院ソシオ・アート・アンド・サイエンス研究部

〒770-8502 徳島市南常三島町1-1

E-mail: miyazaki@ias.tokushima-u.ac.jp

Moraes's Garden

— (3) In the Eyes of a Stranger —

Takayoshi Miyazaki, Masaya Satoh, Motohiro Sakai

Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima

1-1 Minami Josanjima-cho, Tokushima, 770-8502, Japan

E-mail: miyazaki@ias.tokushima-u.ac.jp

Abstract

This paper is an essay on Moraes's *O "Bon-odori,, em Tokushima*, part of the outcomes of the Project Studies by the activities in 2012 of Moraes's Studies Group launched in July 31, 2010. The members of Moraes's Studies Group, T. Miyazaki (English Literature), M. Satoh (Plant Physiology), M. Sakai (Clinical Psychology), all at the Institute of Socio-Arts and Sciences, The University of Tokushima, have been continuing to try to analyze Moraes's works and to approach a new facet of Moraes's biographical aspects. Moraes was fascinated by the far-east Japan, and fell in love with Ó-Yoné, who died soon after the marriage. After her death Moraes decided to live in Tokushima, which was Ó-Yoné's hometown. He lived with Ko-Haru, Ó-Yoné's niece, for a while until she died from tuberculosis at the age of 23. His life until his death in Tokushima was a kind of hermit, disregard of his fame as Consul General and Navy high-rank Officer of Portugal, and other financial merits entailed with them.

Moraes published *O "Bon-odori,, em Tokushima* in 1916 after Ó-Yoné died. This work might be regarded as based on the forms of diary and essay, seemingly as reports from Tokushima to Bento Carqueja, editor of *Comércio do Porto* (Porto Commercial Newspaper) in Portugal. He consistently wrote these installment reports from Tokushima in the eyes of a stranger, putting some distance between him and the people in there. Everything seen in the eyes of Moraes wore some beautiful visual aspect because of his memory of Ó-Yoné. He expressed his distress at the attitudes of Tokushima people at some sections in this book; that is, he was seen as a 'ke-tojin,' an alien. This discrepancy and distancing from the people among whom he lived as a hermit, he seemed to see the deep gap between him and the people he loved, leading to the pathetic outcry at the final part of his letters to Bento Carqueja, the editor. This tentative paper intends to open a new perspective in a rather fixed image of Moraes and studies about him.

Key Words: Wenceslau de Moraes, *O "Bon-odori,, em Tokushima*, Forms of Diary and Essay, stranger, Moraes's Studies

1.はじめに

本研究は、徳島大学総合科学部学部長裁量経費・平成24(2012)年度総合科学部創生研究プロジェクトによる研究成果の一部である。

本研究論文の目的は、プロジェクトの一環として開いている「総合科学部モラエス研究会例会・読書会」での成果を基にして、モラエスの著作について新たな考察を加え、さらにモラエスの新しい側面を見出してゆくことである。

モラエスは、日本の日記文学、随筆文学に傾倒しながら、「随想」として『徳島の盆踊り』をポルトガルの『ポルト商報』に連載発表した。しかしながら、「随想」の体裁を取りつつ、日記としての形も取り、同時に知人友人に宛てた書簡の側面と形式をも取っているこの作品は、結末部において彼が最初に意図していた「随想」とはかなり調子が変わっていることがうかがわれる。モラエスがお手本のひとつとして参考にした紀貫之の『土佐日記』は、その根底には亡くした娘への想いが込められているが、同様に、「随想」として自分の目を見た徳島を描きつつ、亡くしたおヨネへの想いが「随想」として込められたこの『徳島の盆踊り』には、異邦人としてのモラエスの視線の先に、彼の生と死に対する思いがにじみ出ている。「随想」であるが故に、当然ではあるが、モラエスが実際に目にしたものに自分の「随想」を絡め被せる時、「実」から「虚」への転換がなされ、この「随想」としての『徳島の盆踊り』が、先の論文で指摘したように、質的な変化をきたして、「虚」の部分において普遍化を成し遂げているといえるであろう。

2. 『徳島の盆踊り』¹

—幻想としての「徳島」—

ヴェンセスラウ・ジョゼ・デ・ソーサ・モラエス(Wenceslau José de Sousa Moraes, 1854-1929)が、『徳島の盆踊り(内的随想記)』(O "Bon-odori, em Tokushima [Caderno de Impressões Intimas])を書き始めたのは、1913年12月のことである。ポルトガルの新聞『ポルト商報』の編者ベント・カルケジャ(Bento Carqueja)の

要請によりほぼ1年かけて執筆され、1914年3月5日から1915年10月3日にかけ68回に分けて掲載されたが、執筆の前に、当然ながら題名や全体の構成は十分に考えていたと思われる。こうした執筆の経緯を考えると、徳島に移り住んで執筆に取り掛かった12月までの時間、あるいはおヨネが亡くなってからの時間が、彼には「随想」(impressões íntimas)を醸成する時間となっており、それが「実」—現実との間に一定の距離を生み出しているといってもよい。

モラエスは、1913年7月4日に徳島にやって来たと言われている。徳島に至るルートについては、諸説あり、モラエスの遺品がほとんどすべて焼失してしまった以上確かめるすべもないが、岡村多希子氏の調べでは、7月4日が最有力となっている²。その時の様子をモラエスは『徳島の盆踊り』の中では、次のように述べている。

夏の晴れた日の午後—正確に言うと、一九一三年七月四日の午後—船を下りて、私のために用意されていたごくさやかな住居に歩いていったときに受けた徳島の第一印象は、これ緑……という圧倒的な、だが快い印象であった！陶酔した瞳の中にどっと入り込む緑。ふるえる鼻孔にどっと流れこむ緑。緑、緑、緑一色！……何ひとつ考えることをゆるさない、目の前にくりひろげられてゆく風景のディテールに注意を向けることをゆるさない、まことに強烈な、排他的な印象。色と香りによって生み出された陶酔感とでも言えよう。(59-60)

7月4日のあたりといえ、今とは気候が異なるとはいえず、梅雨の後もあってその蒸し暑さは当時でもかなりのものであったろうと推測される。実際、この頃モラエスがポルトガルの妹フランシスカに宛てた絵葉書には、徳島の暑さを次のように書き記している³。

7月8日 すでに手紙で説明したように、精神への平安を求めにやってきたこの家から

¹ 『モラエスの日本随想記 徳島の盆踊り』(ことのは文庫, 徳島: 徳島県立文学書道館, 2010年3月)。以下、『徳島の盆踊り』とし、引用はすべてこの版に依るものとし、引用の後に括弧書きで示す。

² 岡村多希子, 『モラエスの旅—ポルトガル文人外交官』(東京: 彩流社, 2000年), 238。

³ 岡村多希子, 『モラエスの絵葉書書簡』(東京: 彩流社, 2000年)。

便りをする。気分がいい。6月16日付の封書落手した。

7月15日 とても暑い。・・・

7月25日 ひどく暑い。焼けつくようだ。リスボンでもとても暑い由。・・・

7月29日 僕は元気だが、とても暑い。・・・

8月9日 ひどく暑い、日本中そうだし、恐らくそちらもだろう。

8月13日 ひどく暑い。

『徳島の盆踊り』においては、いかにも爽やかな、強烈な緑の印象に被われた徳島の姿が浮かんでくる。だが、実際にモラエスが住み着いて抱いた徳島の印象は、絵葉書の文面からうかがえるように、かなり現実的で陳腐な生活感にあふれ、むしろわれわれのよく知っている夏の徳島が感じられる。『徳島の盆踊り』では、7月の徳島というよりは、新緑に萌える5月頃の徳島の印象が強いように感じられるが、「随想」というものを書こうとする過程で美化され、「随想」という文字の世界では一種の楽園のような世界になっているといってもよいだろう。

モラエスにとって、徳島への移住の決心は、おヨネの墓がオヨネの故郷である徳島に建てられたことが大きなきっかけであると考えてよい。徳島への移住の理由をめぐっては、当時関わりのあった永原デンという女性とのことも取り沙汰されているが⁴、モラエスにとっては、以前から執筆を構想していた『徳島の盆踊り』の世界を実際に生きること、徳島での生活を実践することが大きな目的であり、それが老齡を迎え、死を意識し始めた彼の決意でもあったろうと思われる。徳島を隠棲地の場所として選んだ理由は、『徳島の盆踊り』の1915年4月3日の部分には次のように述べられている。

このノートに今書きつけたちょっとした覚えがきは私の現在の立場—零—を充分すぎるほどよく説明している。

隠棲地として徳島を選んだ理由については、これまた容易に説明がつく。

ほんのちょっと前—二年もまだ経っていない—八月のある午後、ある人が私の手を握りしめて、

あることを熱心に求めた。かわいそうな人で、母親や兄弟姉妹、身内が多数いるのだが、誰ひとりそばにおらず、率直に言うと、彼女のことなどほとんどかまってくれない。彼女は、どんなにむずかしそうなことであっても、自分の願いを心からかなえようとしてくれる唯一の人は私であるということをよく知っていて、私に求めたのだ、自分の生命を永らえさせてほしいと。・・・

そして、私は彼女の願いをかなえてやらなかった。そうする力が私にはなかった。彼女はあきらめの言葉をつぶやき、最後の力をふりしぼって私の手を握りしめ（今でもその感覚が残っているかだって？・・・）、死んでいった。・・・

死の翌日、遺体は、日本ではほぼ一般的に行われている習慣にしたがって、神戸の火葬場で焼かれた。

遺骨はそのあわれな死者の生地である徳島に運ばれ、町のいくつかの墓地のひとつにあるささやかな墓石の下に納められた。

さて、数ヶ月経たある日、私は神戸で、義理もなく権利もない、全くの自由の身、まったくのひとりぼっちとなった。この単なる事実から、ある決意を即刻かためなければならぬことになった。

(中略)

答えはすぐには出なかった。というよりはむしろ、長いこと考えた。いくつかの案、いくつかの場所が頭に浮かんだ。その利害得失を検討した。そして、ついにおよそ次のように叫んだ。

「生者から逃れよ、徳島へ、お前になつかしい名前を思いおこさせる、お前に追慕の念を抱かせるあの墓のそばへ行け。

感情生活—お前になおも地平を開くことのできる唯一の生活—については、人はふたつのやり方でしか生きることにはできない。希望によってと、追慕の念によってだ。人生の旅路のほぼ終わりにあつてすべての希望が消え去るときに、追慕の念に慰めを求めることは当然だ。」

そして私は徳島に來た。(192-5)

先に述べた永原デンとの事情が、「答えはすぐには出なかった。というよりはむしろ、長いこと考えた。いくつかの案、いくつかの場所が頭に浮かんだ。その利害得失を検討した。」という文章の裏に推測されるもの

⁴ 岡村, 『モラエスの旅』, 230-7.

の、最終的に「追慕の念」によって生きる決心をした様子が伝わってくる。「現在の立場一零一」という言葉は、隠者として「随想」を書くにあたって、手本とした鴨長明を意識していると考えてよい。ポルトガル海軍軍人として、ポルトガル総領事として働いてきたモラエスは、母国に対する思いと同時に母国の彼に対する扱いに苦悩していたことは知られているが、ここでの文章でもうかがえる。

人生の夕暮れに、旅路のほぼ終わりになって、できる限り可能な限り自国のために働いてきたあとで、その義務と権利を棄て、貧しく、忘れ去られて、その同胞たちの正当な無関心の経衣につつまれて、遁世する可能性、口実、勇気を自らのうちに見出す人は幸いである。

(中略)

孤独の中で、貧しさの中で、野心のまったくない簡素な生活の中でこそもっともよく、老人は過ぎ来し歳月の思い出を喚びさまし、青年時代をよみがえらせ、それを判断し、論評することができる。そして、そうすることを恐れることはないのだ。(188-90)

モラエスが、自身の昇進に関わって大きな不満を抱いたことはよく知られているが、そうしたいざこざへの思いと、亡くなったおヨネへの思いなど、さまざまな思いが徳島移住への決心に結びついたと考えるのが自然だろう。細かな実際上の理由は憶測の域を出ないとしても、60歳という年齢を迎えつつあるモラエスにとって、たとえ鴨長明がお手本とはいえ、ある境地に至ったであろうことは想像できる。ただ、「貧しく、忘れ去られて」とあるにも関わらず、当時のモラエスは、海軍軍人として総領事としての収入で、かなりの蓄えを持っており⁵、知人や友人にも恵まれ、ポルトガルには妹フランシスカやその家族、さらにはマカオに亜珍とふたりの子どももいるのである。また、亡くなった時には、その遺産額と遺産の分配を巡っては周囲の人達を驚かせてもいる⁶。従って、モラエスの現実の境遇と、彼が『徳島の盆踊り』の中で装っているイメージとの間には大きな隔りがある。

⁵ 岡村、『モラエスの旅』, 345.

⁶ 岡村、『モラエスの旅』, 345-53.

先に引用して示した作品の中での徳島の印象と、現実の梅雨後の蒸し暑い徳島との違いが示しているように、『徳島の盆踊り』は、「随想」という仮面をつけての多分に理想化された世界、虚構に近い作品の世界であると見てよいだろう。

ちなみに、徳島の暑さについてその年以降の絵葉書書簡に書かれた文面を眺めてみるとさらに興味深い。

1914年

7月18日 池田の公園の景色。ここからぼくは吉野川の素晴らしい風景を見たのだ。今日は、ぼくが日本で経験したいいちばん暑い日のひとつだ。ぼくの家の日陰での温度、摂氏36度。こうして生きているのは容易じゃないよ。

7月25日 ぼくの方は燃えるように暑い。・・・今日は、池田へ行く途中の吉野川のこの風景が行くよ。

7月27日 とても暑い。お前はグアルダで避暑中!

8月3日 お前は・・・グアルダではたのしい日々を過ごしたことだろう。ぼくは、溶けてきたし、数週間うちに訪れるであろうさわやかな日々を待って、書きものをしたり怠けたりしながら相変わらず溶け続けているよ。

1915年

7月15日 すさまじい暑さがはじまる!

7月18日 今年はものすごい勢いではじまっている猛暑がお前に便りを書きたいという気持ちを殺ぎはするが、封書も送ろうかと思っている。・・・ぼくはここで焼けているが、まだ生きている。

7月19日 とても暑い。僕の部屋で摂氏34度以上だ。

7月29日 アルコール類は一切ゆるさないというのが学校のきまりであった。身体が弱っていると訴える学生に例外をみとめ、部屋にビール樽を置いておくことが許可された。週末に、校長が件の学生を訪ね、からかうような調子できた。「ビールが君にとって何か利点があると今でも考えているかね。」すると学生はたちどころに答えた。「もちろんです。先生に保証してもよろしいですが、一週間前にビ

ール樽がぼくの部屋に運ばれたときには、ぼくはそれを動かすこともできませんでした。今では、樽をもって部屋中を歩きまわることできます……

1915年

8月5日 昨夜から今朝にかけて、豪雨を伴った大嵐。今朝、ぼくの通りは海になっていた。何と悲しいこと！

8月8日 大雨が降っている。孤独な片隅にいるぼくを悲しくさせる。しかも日曜日だ！以前は、神戸にいるころは、日曜日にはよく出掛け歩いていましたが、今では、どの日もぼくには同じだ……

8月12日 ひどく暑い。

8月26日 雨と暑さ。それに盆踊りの祭り（死者のための踊り）が今日終わる。

1916年

7月23日 ひどい暑さだ。

8月6日 暑さのさかりになった。日陰のぼくの部屋で摂氏33.5度の中、お前に書いている。溶けてしまうよ。だが、ぼくは、元気を出して、ぼくなり抵抗している。

8月27日 すごい暑さだが、勇敢に耐えている。……昨春この村に行つて、右手に見える寺（紀三井寺）を詣でた。

10月5日 この葉書と、4日遅れの手拭が行く。1日の日曜日は、ぼくはとても忙しかったのだ。以前話した病気の女が死にそうになって、実際に、2日に死んだのだ。ぼくは元気だ。

7月と8月の徳島の暑さが文面からにじみ出てくるが、今と違ってエアコンもない当時の状況を考えればかなりの暑さだったろうと思われる。ここで紹介した絵葉書書簡の文面でさらに興味深いのは、そうした現実の徳島と、『徳島の盆踊り』に描かれた徳島の違いと同時に、モラエスのユーモアと行動力の逞しさである。モラエスは、海軍士官であり、多くの部下を率いるのに必要な能力を持っていたであろうし、総領事として公務を遂行する上では、総領事の職として必要な社交性と行動力、そして日々の活発な活動力を持っていたはずである。絵葉書書簡からうかがえるモラエスの

日々の行動は、隠棲という言葉から浮かぶ孤独なモラエスのイメージとは違っている。毎日おヨネの墓参りに出歩き、買い物もし、機会があれば鳴門や池田、遠方の紀三井寺にも出掛けている。神戸にいた頃は、週末には必ずどこかに出掛けていたこともうかがえるのである。

『徳島の盆踊り』で装っている隠者としてのモラエスは、自己韜晦をも行っている。徳島移住を決心した最大の理由として「ある人」の存在を述べているが、それがおヨネであることは後になって明らかにされることである。また、絵葉書の文面に出てくる「病気の女」がコハルであることも後になって明らかになるけれども、おヨネの場合と同様に直接にはその当時誰にも明らかにはしていない。しかしながら、この他人事のように装った自己韜晦は、現実に存在する女性たち、おヨネとコハルと、その縁者へのモラエス独特の深い思慮があつてのことと想像される。

「随想」を日記として書くことは、モラエスも述べているように、「過ぎ来し歳月の思い出を喚びさまし、青年時代をよみがえらせ、それを判断し、論評すること」である。それ故に、モラエスが描いた徳島は、オヨネとの「過ぎ来し歳月の思い出」と「追慕の念」で美化され、いかにも文明から離れた楽園的な世界となっている。モラエスの「徳島」は、彼の「過ぎ来し歳月の思い出」と「追慕の念」に浮かび上がる、いわば幻想の「徳島」であるといつてもよい。

前にも述べたが⁷、モラエスは『徳島の盆踊り』を書くにあたり、日本の日記文学、随筆文学を参考にしており、紀貫之の『土佐日記』、清少納言の『枕草子』、鴨長明の『方丈記』、吉田兼好の『徒然草』を挙げている。こうした随筆文学を手本にして、モラエスが試みようとした「随想」は、「徳島」という「実」を素材としながら、「虚」としての「随想」、「内的印象」(impressões íntimas)を交えることである。その意味で、日付を記した日記体の文章は、一種の記録であり、過去の温存である⁸。それは、現在の中に過去を存在させることに他

⁷ 拙論、「モラエスの庭— (2) 「随想」の変質—」『地域科学研究』第2巻（徳島：徳島大学総合科学部、1912年）、84-90。

⁸ ドナルド・キーン「日記を付けることは、言ってみれば時間を温存することである。」『百代の過客—日記に見る日本人(上・下)』(東京：朝日新聞社、朝日選書259、1987年)、13-14。

ならない。「老人は過ぎ来し歳月の思い出を喚びさまし、青年時代をよみがえらせ、それを判断し、論評することができる。そして、そうすることを恐れることはないのだ。」(188-90)と述べたように、モラエスは、自分自身さえも他者のように時間の中に置いてその老いの姿を眺め、同時に老いた異邦人として、生きる者、死んだ者に目を向けているのである。実は、それが、モラエスが抱いた徳島の印象、生者と死者とがいっしょに暮らしている徳島に重なっているといってもよい。

『徳島の盆踊り』は入念に構成されていて、まずは日本独特といってもよい随筆文学を取り上げながら日本人の特性を紹介し解説をおこなっている。次には、徳島という地方の紹介、その自然と風土の紹介と進んでゆき、ポルトガル人のモラエスが徳島に移り住んだ理由とその内面を随想として述べてゆくのである。

当然とも言えるが、『ポルト商報』の読者を意識して、彼がおこなっているのは、徳島に移り住んだひとりの異邦人としての自分が見たもの、感じたものを一定の距離を持って説明をしながら伝えることである。従って、そこには、ヨーロッパのポルトガルの人々に理解し易いように、解説と同時に相似のイメージを重ねるようにしている。

上で述べたように、緑に被われた「緑、緑、緑一色」の徳島は、島の楽園のイメージが強い。モラエスよりも先に日本にやってきたロチやハーンが、当時のヨーロッパの人々と同様、ヨーロッパを逃れ、アジアに、はるかな東洋の小さな島国である日本に楽園を見出したように、モラエスも日本には楽園を見出している。だが、その日本で、おヨネとともに暮らした神戸は、おヨネの死後、「弱り切った精神とは決定的に相容れないことがかねてよりはっきりしていた文明化された大都会での生活、偽りの外観で飾ったその洗練された生活の苦味」(61)しか感じられない神戸となり果てている。その神戸を離れたモラエスは、おヨネへの「追慕の念」もあって、彼女の墓がある徳島に美しい楽園の幻想を重ねて見ているのである。

モラエスの最大の理解者であったベント・カルケジャは、その「序文ではない」にこう書いている。

マクベスの夢!・・・闘いののち、精神は奇妙な幻想に圧倒されたように感じる。静かな、ほのぐらい森を通っているような気がする。その森で、炎につつまれた大木のそばに三人のいずれも不

可解な女の姿を見かける。彼女たちが何者であるかを知ろうとすればするほど、彼女たちは飛ぶようなはやきで逃げ、「やがて王になられるお方!」と叫びながら、ある壮麗な宮殿に走り込む。

「ポルト商報」で「ぼんおどり」の最終部分を読んだ日以来、私たちの心の中にはひょっとしてヴェンセスラウ・デ・モラエスはマクベスの夢を見ているのではあるまいか、という印象が刻まれた。(16)

カルケジャのモラエスの夢、あるいは幻に対する理解は深い。ヨーロッパ人が、自分たちの文明化する世界に幻滅し、ヨーロッパを逃れて東洋に楽園を見出した時代に、多くのヨーロッパ人は東洋に、あるいは世界の果てに出掛け、やがては幻滅を味わいつつその地で亡くなるか、あるいは再びヨーロッパに舞い戻ってきた。ハーンは、日本の女性と結婚し日本に帰化し日本に溶け込んだように思われるが、晩年に至って日本には幻滅を感じたといわれている。ロチも同様に日本には幻滅を感じてヨーロッパに戻った。だが、モラエスがお手本としたそのふたりとは違い、モラエス自身はポルトガルに帰ることもなく、徳島に16年間暮らしをを終えたのである。日本の女性といっしょに暮らしながらも、正式な結婚をすることもなく、日本に帰化することもしなかったモラエスは、日本をハーンやロチのように賛美しながらも、異邦人として一定の距離を置くことで日本に対する幻滅を感じることから逃れていたといってもよい。

モラエスのよき理解者であるアルマンド・マルチンス・ジャネイロはモラエスについて、次のように述べている。

彼は日本を最もよく理解し、日本人のように日本を愛した異邦人であった。

しかし作家としてはほとんど何も日本人に与えていない。ポルトガル人たちが昔も今も彼の著書を暖かく迎えている事実が立証するとおり、ポルトガル人の嗜好を判断し、その感受性の渴望に答えて彼が書いたのは、ひとえにポルトガルのためであった。(206)⁹

⁹ アルマンド・マルチンス・ジャネイロ、野々山ミナ子・平野孝国訳『夜明けのしらべ—モラエス・人と作品』(東京：五月書房、1969年)。

ジャネイロが指摘しているように、モラエスは一貫してポルトガル語で、ポルトガルの読者のために書いた。ハーンのように、日本の説話、怪談話を再話したり採話したわけではない。英文学の、英語の教師であったハーンの教え子たちが、ハーンの良き理解者、伝導者となったようなことはモラエスにはまったくなかったのである。

モラエスは「老人は過ぎ来し歳月の思い出を喚びさまし、青年時代をよみがえらせ、それを判断し、論評することができる。」(188-190)と述べているが、それは、時間的にも空間的にも対象から距離を置くことである。都会から離れた一地方都市である徳島に「貧しく、忘れ去られて」長屋に隠棲をしつつも、モラエスの実際は、貧しくもなければ、忘れ去られてもいなかったのである。モラエスの徳島での隠棲は、鴨長明に倣っての、「質素な生活と高邁な思索」(plain living and high thinking)¹⁰の実践であり、それは、ワーズワース(William Wordsworth, 1770-1850)からアメリカのエマソン(Ralph Waldo Emerson, 1803-1882), ソロー(Henry David Thoreau, 1817-1862)に至る、19世紀知識人の理想でもあったろう。欧米で理想とされたものが、極東の日本では既に平安の時代に実践されていたこと驚きであったことは、モラエスが日本の随筆文学を取り上げ、「随想」として取り組むと宣言した点にうかがえる。「随想」はモラエスにとって「高邁な思索」と同一のものなのである。

3. 「け・とーじん」—異邦人として—

「高邁な思索」つまり「随想」として「判断し、論評すること」には、対象—それが「思い出」という過去であれ、現実の目の前のものであれ—との間に距離を取り、観察者として眺めることが必要である。それは、自分が異邦人でしかないことを認めることであろう。

その距離は、時として、自分がポルトガル人、「け・とーじん」(256)と呼ばれることにも関わっている。「徳島」の楽園的な美しさを紹介し、「徳島」の世界を解説しながらも、そこには、異邦人であるが故の悲しさと疎外感が加えられている。

そして、その印象は実に魅惑的であり、私は慈悲と恩寵の雰囲気につつまれて、通りすがりの人たちに思わず微笑みかけた。そして、その人たちも微笑みを返してくれたので私はその微笑みを、避難所として選んだこのもてなしのよい土地で心身の疲労を回復するようすすめてくれる心やさしい挨拶の言葉と解して、感謝したのであった。それが私の思いちがいであったことを、そしてヨーロッパ人を心底憎悪している無愛想で保守的なこの善良な徳島人の微笑みは、打明けたところ高齢のために背が曲がり、骨ばり、老いぼれた、このグロテスクな私という見本がまずいことに代表している白人に対する軽蔑と反感を、単にあらわしているにすぎないことを知ったのは、のちになってである。顔の半分をおおう私の長いもじゃもじゃのひげが、ひげのほとんどないさっぱりとした顔に立ちまじって、私をよりいっそう滑稽なものにしていたのである。(61-62)

まだ七歳にならないけれども小学校の一年生のひとりの子は、私と話すとき、私をていねいに「とーじんさん」(「さん」はセニョールにあたる)と呼ぶ。

「とーじんさん」はすなわち未開人、野蛮人、異教徒という意味であるが、昔のポルトガル人がモーロ人やユダヤ人を呼ぶときのペロ〔犬〕に多少似た、侮蔑的な調子がいくらか含まれる。日本語にはまた中国人と区別して特にヨーロッパ人を指すのに、「け・とーじん」すなわちひげづらの未開人という語がある。

ここ徳島で、ひとりで散歩をしていると、いたずらっ子や野卑な人たちが通りすがりにその罵りのことば—「とーじん！」とか「け・とーじん」—をとときどき口にする。日本の他の場所でも同じことがすでにあっただけけれども、ここほど頻繁ではなかった。

しかし、私に微笑みかけ、私にお辞儀し、私を「とーじん・さん」つまり未開人さんとしていねいに呼んでくれるあの六歳の子は、きっと私を侮辱するつもりはなく侮辱することを知っているのではない。ヨーロッパ人とかかわりがまだきわめて希れな地方や田舎では、内輪のおしゃべりでは

¹⁰ William Wordsworth, *Written in London, September 1802*, l. 9.

白人はまだこんな風に、「とーじん」とか「け・とーじん」という侮辱的な語でしか呼ばれないのだ。こどもたちはこれらの単語を家族の口から自然に学ぶのである。

人々が罵って口にするこれらの怪しからぬ呼び方をヨーロッパ人がいつも苦々しいおもいで聞くのはもちろんである。率直に言って、私自身、しばしばいやな気持ちになる。しかし、そんなに怒ることもないのだ。民族衣装の着物を着た日本人がポルトガルの地方都市や田舎に行ったら、徳島のポルトガル人がうけている以上のやさしい扱いをされるであろうか？・・・

いずれにせよ、今日なお私たちが野卑な日本人からうけ、そしてつい数十年前まで公文書の中で日本政府が使っていた「とーじん」とか「け・とーじん」という屈辱的な呼び方は、人種的嫌悪、感情の対立、白人と協調し得ないことの単なるあらわれにすぎない。私たちが心から感嘆すべきは、長年にわたる祖先からの伝承によって凝縮され、すでにまぎれもない日本人の民族性となっている、情熱の極致にまでいたっているこの愛国的矜持、この強い国民的連帯感である。日本人は、西洋列強の打撃的保護から自由になって独立国としてすばらしい発展を遂げるための最大の刺激—大きな刺激—をこの民族性のうちに見出している。

このような事実の壮大さを前にするとき、二、三人のいたずら坊主、二、三人の車ひきから毎日「け・とーじん」と呼ばれるとしても、どうだというのか？・・・ (256-7)

日本人の微笑みを、徳島人の微笑みを、もてなしと心やさしい挨拶としてみなしたことが大きな誤解であり間違いであること、幼い子どもたちでさえ無邪気に親から自然に学ぶ「とーじん」、「け・とーじん」という言葉が、日本人を知ろうとし、日本に溶け込み、日本人が理想とする「貧しく、忘れ去られて」の生活、隠者の生活をしようとしても、モラエスに対して大きな距離を置いているのである。「質素な生活と高邁な思索」のために日本を眺め、一地方都市である徳島を眺め、そこに住む人々を眺めながらも、モラエスの目に映ったものは、亡きおヨネの追慕の念に包まれた、美しい楽園のような「徳島」と、彼を自分たちとは違う者、異邦人として見ている人々なのである。

異邦人として徳島を眺め、ポルトガル語で一貫してポルトガルの読者のために著述をしながら、「随想」として徳島の生活を描いていたモラエスは、皮肉にも自分が異邦人としてしか見られていないことを痛感しているといってもよい。『徳島の盆踊り』の最後の方で、自分のもとに死者たちの霊が戻っては来てくれないという悲痛な思いは¹¹、自分が楽園にいながらも異邦人でしかないという思いと重なっているのであろう。

参考文献：

- アルマンド・マルチンス・ジャネイロ、野々山ミナ子・平野孝国訳『夜明けのしらべ—モラエス・人と作品』東京：五月書房、1969年。
- ヴェンセスラウ・デ・モラエス、岡村多希子訳『徳島の盆踊り』ことのは文庫、徳島：徳島県立文学書道館、2010年。
- 、『おヨネとコハル』東京：彩流社、1989年。
- 岡村多希子、『モラエスの旅—ポルトガル文人外交官』東京：彩流社、2000年。
- 紀貫之、『土佐日記 貫之集』（新潮日本古典集成）東京：新潮社、1988年。
- ドナルド・キーン、『百代の過客—日記に見る日本人（上・下）』（朝日選書 259, 260）東京：朝日新聞社、1987年。
- 徳島県立図書館、『モラエス案内（増補再販）』徳島：徳島県立図書館、1995年。
- 徳島県立文学書道館、『モラエス生誕150年・ハーン没後100年—モラエスとハーン展—東洋に魅せられた二人の西洋人』徳島：徳島県立文学書道館、2004年。
- 花野富蔵、『日本人モラエス』東京：大空社、1995年。
- Moraes, Wenceslau José de Sousa. *O "Bon-odori,, em Tokushima (Caderno de impressões íntimas)*. PORTO:LIVRARIA MAGALHÃES & MONIZ, 1916.

¹¹ 『徳島の盆踊り』, 313-5.